文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ　松島の志度街道を歩く

講　師　穴吹 一雄

（高松市文化財保護協会事務局次長）

平成２７年５月２４日（日）

共　催　　高松市歴史民俗協会
　　高松市文化財保護協会
　　高松市教育委員会

目次

一　琴電片原町駅……1
二　東町奉行所……1
三　鶴屋町尋常小学校……1
四　御意見番・直言家老松崎渋右衛門……2
五　旧新塩屋町小学校門柱……3
六　金刀比羅神社……3
七　新橋と杣場川……4
八　八丁土手（堤）と新浜塩田……6
九　新浜塩釜神社と蛤地蔵……7
一〇　今橋と琴電……8
一一　松島本丁筋……9
一二　讃岐の砂糖と向良神社……10
一三　古い民家・商家……12
一四　松島神社……13
一五　御坊川と千代橋周辺……14
・伝　川口番所（船番所）
・千代橋と歌碑
・御坊川井堰跡
・手すけ餅屋と高島最中種製造所
一六　野間道開通記念碑……18
一七　洲端神社……19
一八　覚善寺……20

一　琴電片原町駅

歴史は新しく、昭和二十三年二月開駅。琴電高松駅（現瓦町駅）まで八百ｍの営業運転開始。その後、昭和三十年九月に築港駅まで（九百ｍ）線路が延伸され、現在のような路線となった。

二　東町奉行所

藩政時代、琴電片原町駅を含む東側一帯に「東町奉行所」が置かれていた。「文化年間高松城下絵図（約二百年前）」では「東町御奉行、牢屋、同心」と三区画の表記が見える。すぐ西隣に「西町御奉行」と表記された区画があるのは不思議な感がするが、西町奉行番所が置かれていたらしい。**【図１】**

三　鶴屋町尋常小学校

明治二十五年～昭和二十年まで、奉行所跡地に鶴屋町尋常小学校（昭和十六年からは鶴屋町国民学校と改称）があったが、戦災で焼失した。電車ホーム北端踏切東側に跡地の記念標柱が建てられている。図３のイラストには、門柱や戦前あった西本願寺出張所の屋根が描かれている。**【図２】・【図３】**

四　御意見番・直言家老松崎渋右衛門

一八六〇　井伊直弼暗殺される（桜田門外の変）～井伊派の粛清が始まる。
一八六三　松平頼聰、正室弥千代十七歳（井伊直弼次女）を五年で離縁。
一八六五　松崎渋右衛門、勤皇思想強固理由で投獄。幽閉三年四ヶ月に及ぶ。
一八六八　一月、朝敵事件。六月松崎渋右衛門、朝廷の命により出獄。
一八六九　四月、松崎渋右衛門、藩執政職兼会計農政長の要職に就き（頼聰は事実上隠居し松崎が実権を握る）、六月には十五年前から堤防決壊により使用不能となっていた満濃池修築工事を決定、準備にかかる。
同年九月八日、松崎渋右衛門、保守派の十四名の藩士により城内桜の馬場で暗殺される（四十三歳）。辞世の句は、「君のため国のためには惜しからじ　あだに散りなん命なりせば」で、覚悟の上の登城と考えられている。その句碑は折鶴旅館に建てられていたが、子孫の松崎正照氏（再開発組合理事長：平成二十二年没）が、再開発事業に先立ち、平成十二年に満濃池土地改良区へ寄付し、満濃池堤東端に移された。
一八七一　廃藩置県（高松県となる）
一八七二　松平頼聰、弥千代（千代子）と覆縁。東京で穏やかに暮らす。

五　市指定・旧新塩屋町小学校門柱（元鶴屋町国民学校門柱）

戦災焼失した鶴屋町国民学校は、昭和二十三年四月に場所を移転し新塩屋町小学校として開校した。移転開校に際し、鶴屋町国民学校の東門であった石の門柱四基は、新塩屋町小学校の正門（北門）として移設された。**【表紙】**

この門柱は、「戦争をかいくぐって残された貴重なものであり、小学校教育草創期からの歴史の重みを十分感じさせるとともに、製作当時の気品と風格をよく伝え、他に類を見ない」との理由で、平成二十三年三月に、高松市指定文化財となった。なお、新塩屋町小学校は昭和三十年前後には一千数百名児童が在籍したが、その後児童が漸減し往時の十分の一となった平成二十二年三月に閉校し、築地小学校とともに高松第一小学校に統合された。

六　金刀比羅神社

戦前、冬になると広島から牡蠣船が入港し、新橋の東たもとには「かき辰」（後に片原町商店街へ移転）が、西たもとの金刀比羅神社隣には「かき松」という土手鍋の料理店があった。もう三十年以上前に閉店したと記憶している。航海の安全を見守る金比羅さんは港にはつきものの神様で、北向きに、

こじんまりと鎮座している。

神門の、龍・獅子・鳳凰・麒麟などの巧みな彫刻はすばらしく、作者不明だがおそらく名匠の手になるものであろう。

また、庵治石の社標に注目されたい。香川で右に出るもの無しと称された書家「藤原鶴来」の揮毫によるもの。

七　新橋と杣場川

今から約二百年前の「文化年間高松城下絵図」を見ると、新橋は両側と中央が平橋でその間が太鼓橋二つに描かれ、百六十年前の「讃岐国名勝図会」には両側が平橋で中央に三連の太鼓橋が描かれ、いずれにしても昔は、五重橋であったことがわかる。新橋あたりは、当時、まだ両岸が埋め立てられておらず、橋の長さは百m以上あったものと推定される。**【図１】・【図４】**

現在の橋は、昭和三十三年八月に架けられたもので、相当傷んでいる。

その昔、杣場港とも呼ばれたこの一帯は、「杣」（木が山のようにある）という漢字からもわかるように貯木場であった。

杣場川は、源流を辿ろうにも多賀神社の北側で消滅しており、昔どこから流れてきていたのかは古地図等に頼るしかないが、その源流は、「一・多賀神社から花園町を南へ抜け楠上町から今里あたりや御坊川から」、「二・多賀神社から南西へホテルナンバーワンの裏を通り電話局南へ抜ける斜めの道（三十郎土手という堤が築かれ、その南側は川であったものを埋め立て現在の道になった）を経由し栗林公園あたり」の二系統であったことが分かる。【図５】

杣場川は、宅地開発や道路整備のため上流から順次埋立てられたり蓋かけがされ、かつて夕涼みや釣り船で賑わった新橋付近も大きく様変わりし、また、新橋から南の今橋間は昭和五十一年に蓋かけがされて御覧のような散歩道に生まれ変わり、以北は昭和から平成初年にかけて埋立てと蓋かけにより駐車場になってしまい、かつての面影は見られない。今や、若い人に限らず、新橋が橋だと気付かず通る人も多い。

● 松島の地名の由来

初代藩主頼重時代に、東浜の洲に土手を築きそれまで海であったところを干拓して新田を造った折、その土手に決壊防止のため松を植樹したのが、沖

から見ると松に覆われた島のように見えたことに由来するという。【図４】

八　八丁土手（堤）と新浜塩田

「寛文七年（一六六七）松島スベリ（洲端）の沖より潟元村の沖まで東西の堤防を築き、沖松島、木太、春日の潟地を新開とする。下往還より南手の新開は生駒時代に西嶋八兵衛が開く（英公外記）」とある。これは、生駒時代に干拓のため築かれた堤防が下往還（松島本丁筋）となり、（今橋から千代橋東に至る斜めの道は、かつての松島の銀座に相当する目貫通りで、以北が干拓されて後、志度街道となり今に残る）頼重時代に築かれた堤防の一部が「八丁土手」と呼ばれ、（杣場川新橋の北から東へ、競輪場や県立体育館の南側を通り福島酒店あたりまで約八七〇ｍ）戦後宅地開発されるまでその姿を留めていた。

土手の南側には幅三間ほどの水路（八丁堀と呼ばれていた）が設けられ、さらにその南側に道があったが、夏の暑いときは松の陰で涼しい土手道を利用していたとのことである。昭和に入ると松が倒され土手の上に長屋や瓦焼きが建ち並んでいったとのことであり、戦後、堀も埋められ土手の風情は失われ、今は地図の地割でその面影をたどるのみである。【図６】【図７】

現在の市総合体育館やプール、イオンが立地している地域は、一六八八年に塩田が造られたところで、後に古浜塩田と呼ばれたが、八丁土手の北側沖合三百ｍを埋立て、慶応二年（一八六六）に武藤六兵衛らによって開発されたのが新浜塩田である。**【図８】・【文９】**

時代を経て、水質汚濁や製塩法の変遷、輸入塩に押されこれら塩田も衰退の一途をたどり、西端に鉄工所が進出したほか、昭和二十五年に塩田西部に競輪場が造られるなど田域を縮小しながらも存続していたが、二十八年以降は香西に完成した真空式製塩所に鹹水を送るのみで製塩は行われず、ついに三十四年五月、古浜も新浜も全面廃止された。競輪場東側に舟形の県立体育館が建設されたのは昭和三十九年だが、五十年を経て昨年閉館された。

九　新浜塩釜神社と蛤地蔵

元は、杣場川最北端東岸の玉藻橋南側（焼肉屋北隣）に鎮座していたが、浜街道拡幅工事で立退きとなり、平成二年に競輪場南側の現在地に遷座した。塩釜さんの東隣には舟玉大明神が祀られ、西側の蛤地蔵は、明治三年三月に建てられたもので、塩田開発の埋立てで犠牲になった魚介類を供養するため

のものである。【図１０】鳥居には、「國静濱平」（くにしずかにしてはまたいらかなり）、「濱中無事」と、平穏と安全祈願の文言が刻まれている。

一〇　今橋（志度街道第一の橋）と琴電

「今橋」がいつから存在したかは明らかでないが、正徳元年（一七一一）には架かっていたことが、当地で製造した唐箕の墨書から判明している。

「今橋」から下流が「杣場川」で、上流多賀神社のところに架かっていた「高橋」までは「玉川」と呼ばれた。藩政時代末期、玉川には水門が設けられ松島南浦（松島本丁筋を境に南側は香川郡東浜村南浦、北側は北浦という小字であった）一帯の農地を灌漑していた。

玉川は昭和四十年頃に暗渠となり、昭和五十一年には今橋から新橋間も埋立てられて暗渠となり、植栽されて「杣場川緑道公園」として整備された。

明治四十四年十一月十八日に、東讃電気軌道株式会社が今橋から

開通記念花電車

志度間（十二・一ｋｍの営業を開始し、二〇一一年に開通百周年を迎えた。その後、大正二年十月に今橋～出晴間（八坂神社西側）五百ｍが延伸、さらに大正四年四月に出晴～公園北門間千五百ｍが延伸された。

ちなみに長尾線（出晴～長尾間）は、明治四十五年四月に高松電気軌道株式会社によって運行開始され、琴平線（瓦町～琴平間）は昭和二年四月に琴平電鉄株式会社により全通した。これら三社が合併し、現在の高松琴平電気鉄道株式会社となったのは、昭和十八年十一月のことである。

一一　松島本丁筋

志度街道のうち今橋から千代橋東三百ｍ間の十丁（約一・一ｋｍ）は、生駒時代の干拓の土手道で、東下往還とか浜街道と呼ばれていた。松平頼重時代に八丁土手が築かれ干拓が北進し、この道が志度や白鳥方面への本街道として利用されるようになると、様々な業種の商店等が建ち並び「松島本丁筋」と呼ばれる高松有数の商店・職人街となった。昭和初期の様子は、向良神社内説明板の絵地図を参照いただきたい。

しかし、昭和十一年の観光道路（現：中新町～詰田川線）の開通や戦災等を機に商店、製造所、旅籠等が徐々に廃業し、現在は住宅街の様相である。天狗の面にドキッとする「天狗堂」や、三木町へ社屋を移した「喜多猿八商店」は、ここを通る度に昔を想い起こさせてくれる貴重な存在である。

一二　讃岐の砂糖と向良神社

一七三九年に高松藩五代藩主となった松平頼恭（よりたか）は、藩財政の建て直しを図ろうと新たな興産の検討を命じた。その結果、当時稀少価値の高かった砂糖を生産し、これによって財政再建を図ろうと決意し、藩医の池田玄丈に命じて、砂糖製造の研究に当たらせた。玄丈は東浜村の花畑（今の多賀町・花園町）で甘蔗の試験栽培を始め、懸命な努力を続けたが、研究は未完成のまま病に倒れた。弟子の向山周慶（一七四六年白鳥村生まれ）が研究を継続したがうまくいかない。そんなとき、上洛時に知り合った薩摩藩出身の医学生の難儀を助けた縁で、医学生から薩摩藩国禁の砂糖製造法を聞き出すことができたが、それでも成功しなかった。

それから何年もたったあるとき、四国遍路の道中で倒れた薩摩（奄美）生

まれの関良助を医師である周慶が助けた。良助は回復し薩摩へ帰ったが、周慶らから受けた恩が忘れられず、甘蔗の良い種を欲していた白鳥の周慶の元へ、弁当行李に選り抜きの甘蔗苗を隠し持ち国越えをして届けた。こうして周慶は良助を相談相手に一層研究に精進した結果、一八〇三年、ついに待望の白砂糖の生産に成功した。讃岐産は砂糖の最高級品として大坂市場で盛んに取引きされ、最盛期には全体の六割を占めたという。砂糖商い前は大坂商人らから五十万両の借金があったというが、お蔭で藩は財政危機を脱した。

幕末には、相次ぐ火災での普請、婚儀、出兵、海防、賠償金等々、何かと物入りが続き膨大な出費を強いられ、財政は再度厳しい状況に陥ったようだが、それでも維新に際し、高松藩は百万両ともいわれる大枚を新政府に引継いだと伝わっている。（参考：幕末の貨幣価値は、一両＝今の五万円前後）

それで、この両名の功績を偲び、名からとった向と良を合わせ「向良神」として、高松城内へ祀られていた？と伝わるが、天守が解体された翌々年明治十九年に、砂糖の里ともいうべき志度・白鳥方面への街道一の繁華街・松島本丁筋の現在地に社殿が建立され祀られた。現社殿は昭和三十年代半ばに改築されたもの。東ノ丁の氏神・松島神社に対応する西ノ丁の氏神である。

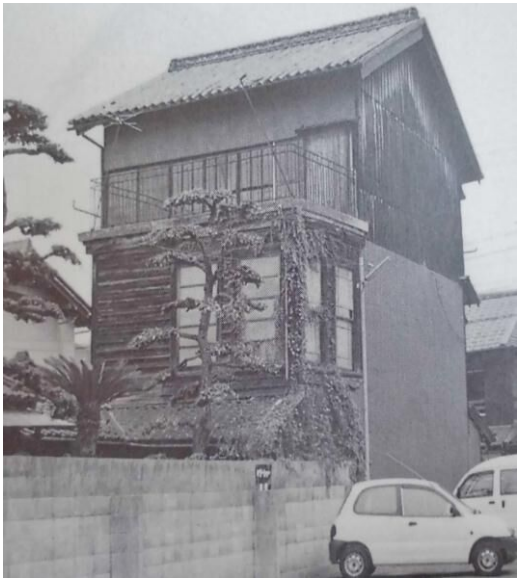
一三　古い民家・商家

松島本丁筋の内、東ノ丁と呼ばれた東半分は、戦災被害が比較的少なく、幕末～明治頃や戦前の民家・商家等が戦後も多く残っていて、西通町筋（現：扇町）と並び独特の風情を醸していたが、徐々に改築されたり撤去されて駐車場になったりで、今残されているのは二、三軒になってしまった。

平成元年の住宅地図**【図１１】を**見ると空地は四区画だが、今は倍増し十区画以上あるように思う。

私の記憶では、平成初年の頃、うだつの上がった家やら木造三階建ての家があったが、いつの間にか取り壊されて空地となった。また、昭和の雰囲気が何とも言えずお気に入りだった朝日温泉も昨年から休業中で、おそらくそう遠くないうちに更地となってしまうのであろう。（――）!!

今は無き三階建の民家↓



一四　松島神社

三宝荒神さんとして地域の人々に親しまれてきた。三宝荒神とは、仏教でいう仏・法・僧の三宝を守護する荒ぶる神という意味で、本地垂迹思想に基づく神仏習合で日本で誕生した神である。庶民からは、竈（かまど）神・火伏せを祈願する神として、また、建造物の守護神として信仰を集めてきた。

さて、大方の神社は二～四神を合祀している。松島神社も稚産霊神（わかむすびのかみ）と市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）を合祀しており、前者は五穀豊穣を、後者は海上安全の神である。

燈籠には、石清尾八幡宮、金毘羅大権現や白鳥大神宮などと刻まれ、奉献した人も中々欲張りだったのか、ここ一社へ詣ればあちこちの御利益がありますようにと願ったのであろうか。松島神社は、元、南西の田園の中に鎮座していたが、社地が狭く何とかせねばと氏子が協議していたところ、大阪道頓堀の寺嶋氏が所有地を寄進し明治四十三年にこの地へ遷座した旨が石碑に刻まれている。石造物の多さに注目。【図１２】

寺嶋氏寄進狛犬

一五　御坊川と千代橋周辺

●伝川口番所（船番所）

江戸時代末期の建築と伝わり、鬼瓦に三葉葵が見えることから、藩の重要な施設であったものと考えられる。今も、修繕しながら住まっているのは素晴らしい。いつ頃からだろうか、二階の屋根の北側がだいぶ沈み込んでいるが…。うぅーん、大丈夫なのか？

●千代橋と歌碑

御坊川の源流は香川町川東下（マツノイパレス西）あたりで、鶴尾小学校の西側からハゼ～三条～楠上～花園～多賀町を流下し、最後は斎場の南側で詰田川に合流している。地割から、かつて川幅が現在の二～四倍あったものと考えられ、護岸工事と並行して両側が順次埋め立てられて宅地や道路になったのであろう。

さて、千代橋は、志度街道では今橋に次ぐ二番目の橋であり、古くは新橋や今橋と同じく木造で、川中央に橋台を設け二連の太鼓橋であった。木橋は腐ったり流されたりするし、何より太鼓橋では荷車の通行に支障があるということで、明治十二年に平らな石橋に架け替えられた。地域民の喜びは大変なものだったようで、当時の高松の文化人五名が詠んだ立派な歌碑がたもとにある。千代橋の歌碑→

【歌碑に刻まれた五首】

・世をわたす人の恵みを行きかひにかけて忘るな千代の磐橋　友安盛敏（国学者

・とこしへに国のさかえと動きなき岩の千代橋かけるみちしも　入谷澄士（歌画人

・松島のまつの八千代を鳴わたる千とりや橋に名づけそめけん　黒木茂矩（教育者

・橋の名の千代をしかけて石ふみの宇禁の花も匂ひわたらん　雁ノ舎棹好（歌人

・水に火に崩れず焼けぬ末の世を思ひながして誰かたくみし　中村尚孝（国学者

戦時下、昭和十九年には鉄の欄干が供出されてコンクリート欄干に改修されていたが、昭和四十八年に石橋から現在のコンクリート橋に改修された。

● 御坊川井堰跡

御坊川の千代橋東側一帯を洲端（スベリ）という。高松城築城地は八輪島という洲で、東浜の洲が松島一帯で、御坊川東側は洲の端だったことからこの地名が生まれたという。がスバタと名付けた方が良かったのではないか？

洲端は、生駒時代後期から頼重時代の十七世紀後半に新田開発された地域で低地であることから、ため池が築造できず（池を造っても取水か配水かのどちらかしかできない）水に大変苦労していた。御坊川の水を利用しようにも、満潮時には一ｋｍ以上も海水が遡上し、灌漑用水としては使えないため、主に麦畑や野菜畑としての利用しかできなかったが、苦労して稲作も行われていた。

明治三十年の干ばつが機となり、海水の遡上を食い止め、東側一帯の農地を灌漑するため、明治三十二年に千代橋の三十ｍほど上流に堰を築いたのである。以来数十年間、農地を潤してきたが、宅地化が進み用水も無用となったため、平成三年に撤去された。護岸に痕跡が残る。

撤去直前の井堰（南側から撮影）奥は千代橋

● 手すけ餅屋と高島最中種製造所

千代橋の東側の街道筋には、昭和三十年頃まで手すけ餅を商う藁葺きの店が数軒あった。手すけ餅とは塩餡の大きな餅で、東讃方面からやって来た人たちが「やれやれ町までもう一息」と一服し、東へ向かう人足などは「腹ごしらえ」と軒先の縁台で食すなど、千代橋名物であったという。塩餡は粘り気がなく、ほおばっていると餡がぽろぽろ落ちるので、手をすけて食べていたことからこの名がついたという。

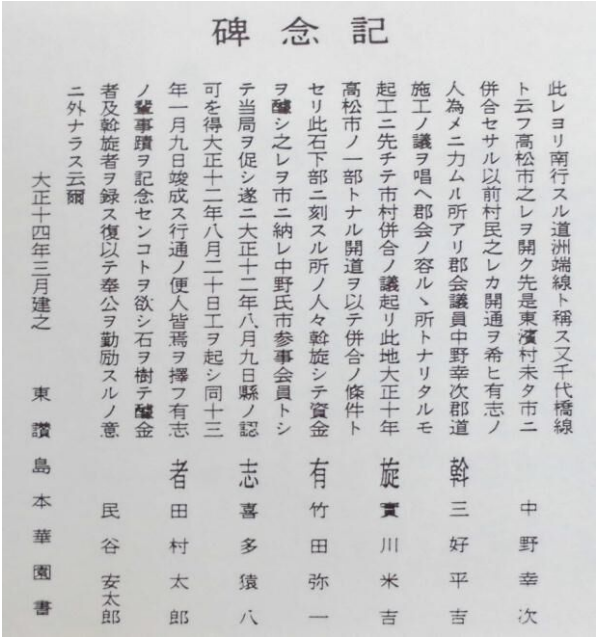
下は当時の「手すけ餅屋」のスケッチで、半鐘があったことが分かる。何となく辻にある散髪屋さんの敷地に似ているとは思いませんか。

千代橋東突き当りの「高島最中種製造所」は、昭和二年の建築とのこと。大抵閉まっているが、たまに戸が開いており中を覗くと、何となく鍛冶屋のような雰囲気であったことを思い出す。

実際は、もち米で最中（もなか）の皮を作る食品工場とのことで、いろんな菓子店のもなか皮の金属型が所狭しと並んでいたので、鍛冶屋のように見えたのだった。最近は、ずぅーっと閉まっているので今も最中種を作っているのかどうか分からないが、昭和の雰囲気が残る存在感のある建築物である。

一六　野間道（洲端線）開通記念碑

香川郡東浜村が正式に高松市に合併されたのは、大正十一年（一九二一）のことである。合併の条件の一つとして、東浜村民念願であった「志度街道と長尾街道を結ぶ道路を建設すること」を掲げ運動した結果、大正十三年一月に開通した。それまでは、記念碑を左へ辿るような水路の泥揚場道しかなく、この開通で大いに往来や物流の利便性が良くなった。



碑念記

此レヨリ南行スル道洲端線ト稱スル千代橋線
ト云フ高松市之レヲ開ク先是東濱村未タ市ニ
併合セサル以前村民之レカ開通ヲ希ヒ有志ノ
人為メニ力ムル所アリ郡会議員中野幸次郡道
施工ノ議ヲ唱ヘ郡会ノ容ルヽ所トナリタルモ
起工ニ先チテ市村併合ノ議起リ此地大正十年
高松市ノ一部トナル開道ヲ以テ併合ノ條件ト
セリ此石下部ニ刻スル所ノ人々斡旋シテ資金
ヲ醵シ之レヲ市ニ納レ中野氏市参事会員トシ
テ当局ヲ促シ遂ニ大正十二年八月九日縣ノ認
可を得大正十二年八月二十日工ヲ起シ同十三
年一月九日竣成ス行通ノ便人皆焉ヲ擇フ有志
ノ鑿事蹟ヲ記念センコトヲ欲シ石ヲ樹テ醵金
者及斡旋者ヲ録ス復以テ奉公ヲ勤励スルノ意
ニ外ナラス云爾

大正十四年三月建之

中野幸次
斡旋者　三好平吉
川米吉
有志者　竹田弥一
喜多猿八
田村太郎
民谷安太郎

東讃島本華園書

一七　洲端神社（水神社と鑿井記念碑）

スベリ地区の荒神さんである。元、御坊川の千代橋下の土手に祀られていたが、護岸改修か洪水での流失防止のためか理由は明らかでないが、いつの頃か現在地に遷座したと伝わる。社殿は、地区の集会所も兼ねられ、木太の八坂神社の秋祭りの前になると二週間くらい毎夜獅子舞の練習が行われていて、八時頃から約二時間の間、鉦と太鼓が賑やかである。

水路に沿って細長い殺風景な社地で、ちょっと神様に気の毒な気がする。また、社名が社名なだけに、学生達は受験期になると迂回をしてここを通らないのは切ないですな。やっぱり地名をスバタにしとけばよかったのでは。

敷地内に、水神さんと鑿井（さくい）記念碑が移設されている。元は、前述の野間道を南へ、高徳線踏切を渡って三百ｍほどの所に灌漑用として昭和十五年に掘られた大井戸にあったものだが、農地の減少で埋められ、平成三年～四年頃にここへ移されたものである。

この地区の農業用水事情がいかに深刻であったかを物語る貴重な資料といえる。井戸が掘られた頃のイラスト図を見ると、あちこち堀だらけなのが分かる。【図１３】なお、この石碑原書も藤原鶴来氏によるものである。

一八　覚善寺

真宗興正派寺院。創建年代は不明だが文化年間絵図を見ると、東瓦町に高善寺（今も寺域を縮小し幼稚園経営をしている）と並び南側（現在の琴電瓦町駅前広場あたりに描かれている）に広大な境内地を構えていたことがわかる。

昭和十一年に観光道路が開通し、暫く後の十四年に現在地に移転したとのことで、その時の本堂がつい先年まであったが、もう八～九年も経つのだろうか、前面道路の拡幅工事に併せ、方形造の阿弥陀堂とともに改築された。

本堂は新堂ではあるが、妻飾りの扠首（サス）

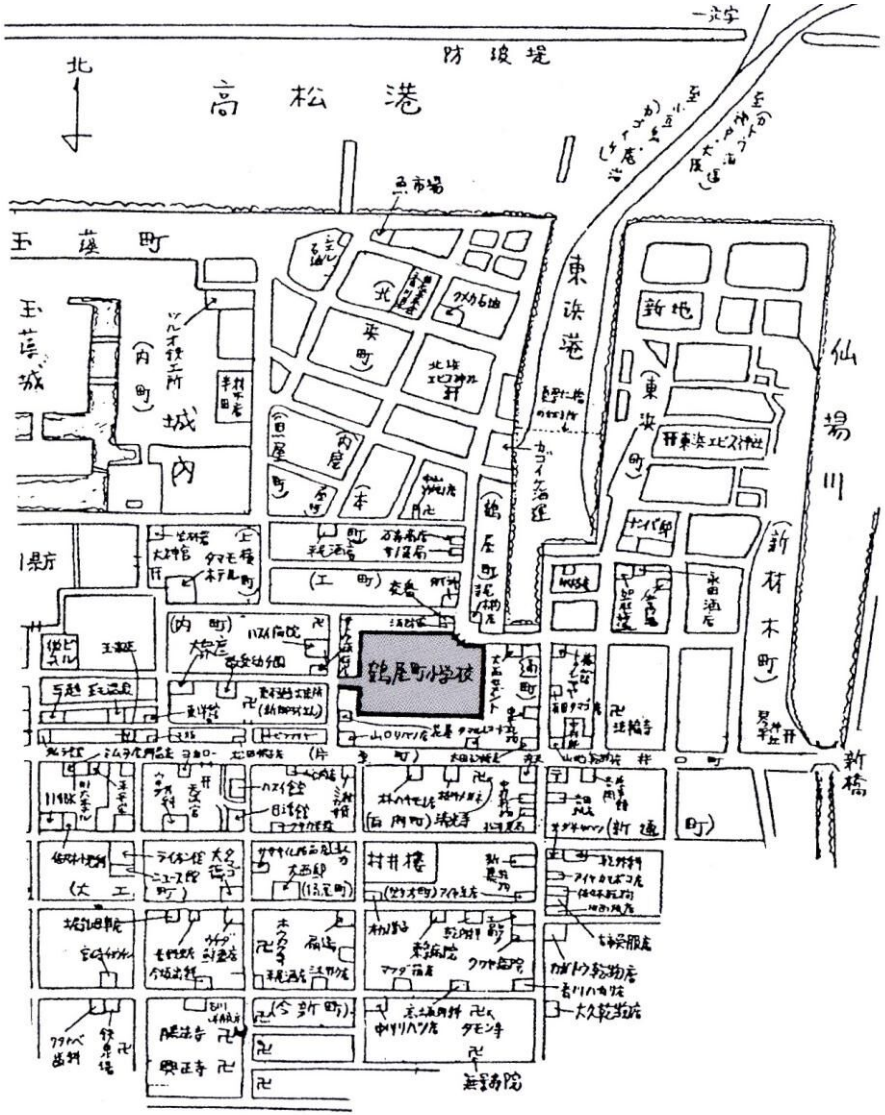
昭和 14 年移転直後の覚善寺

や長押、組物など和様を主体に、向拝部には禅宗様の海老虹梁や巧みな彫刻が施された木鼻が採用され、いわゆる折衷様の寺堂である。上質のケヤキ材がふんだんに使われており、永く後世に残る建造物となることであろう。

なお、ここから南への野間道が、覚善寺以北と比べて四～五倍の幅員になっているのは、高松商業高校の場所に戦前あった軍需工場・倉敷航空会社（それまでは大正十年から倉敷紡績高松工場として繊維製品を製造していた）から林飛行場へ機材を輸送する軍用道路となり、昭和十九年に道路が拡幅されたことによるものである。

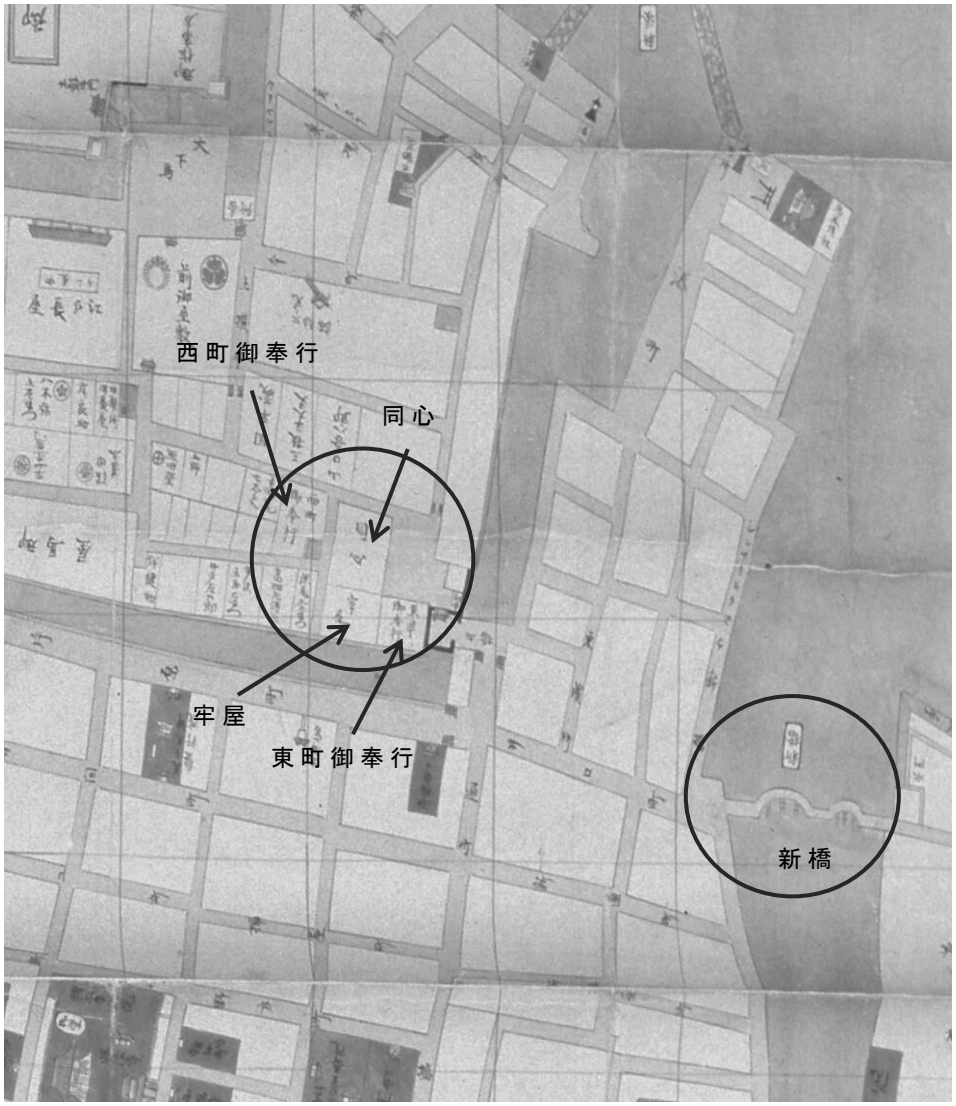
【参考文献等】

・四国開発の先覚者とその偉業（昭和四十二年　四国電力株式会社発行）
・日本名所風俗図会四国の巻（昭和五十六年　角川書店発行）
・文化高松第十六号（平成六年三月　高松市文化協会発行）
・松島の風土記（平成八年三月　松島校区地域おこし事業推進委員会編）
・玉藻の潮（平成二十二年五月　高松市立新塩屋町小学校発行）
・琴電一〇〇年のあゆみ（平成二十四年三月　森　知貴著）
・文化年間高松城下絵図　（高松市歴史資料館蔵）その他各時代地図等



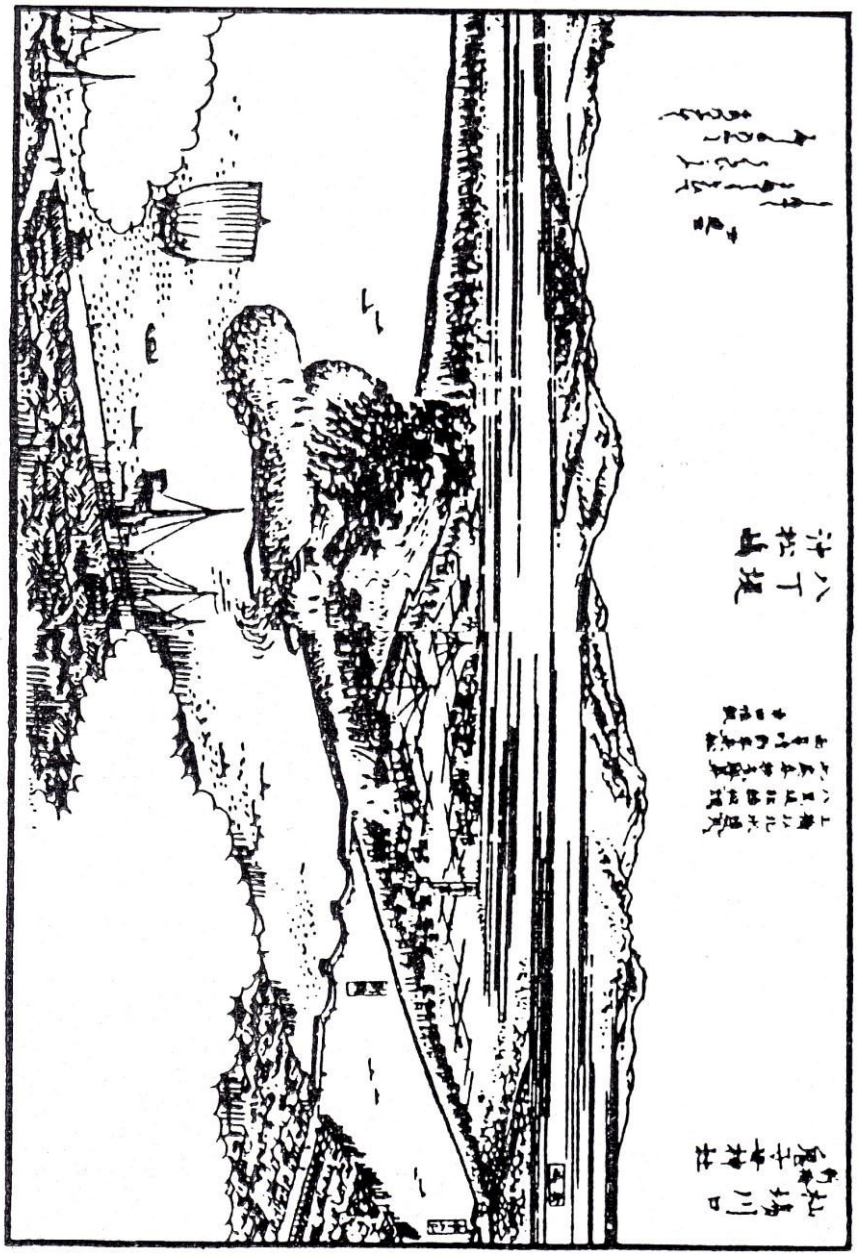
昭和13年の鶴屋町小学校付近

【図２】



文化年間城下絵図に描かれた東町奉行所と新橋

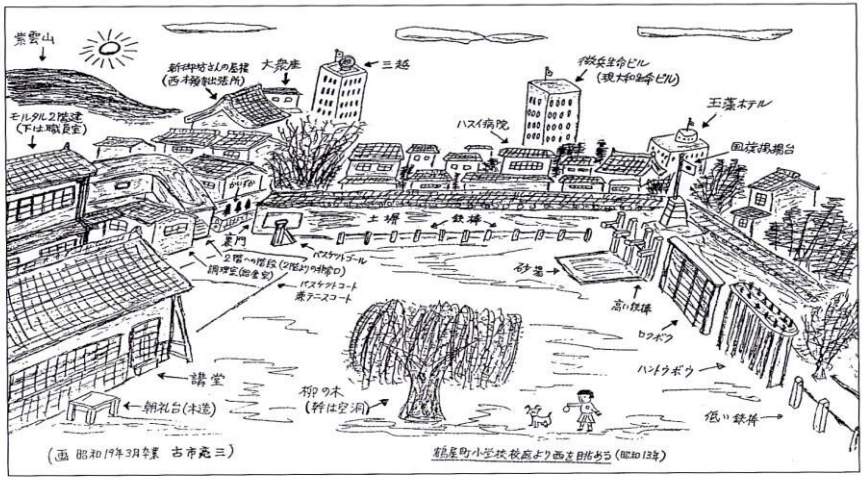
【図１】



『讃岐国名勝図会』

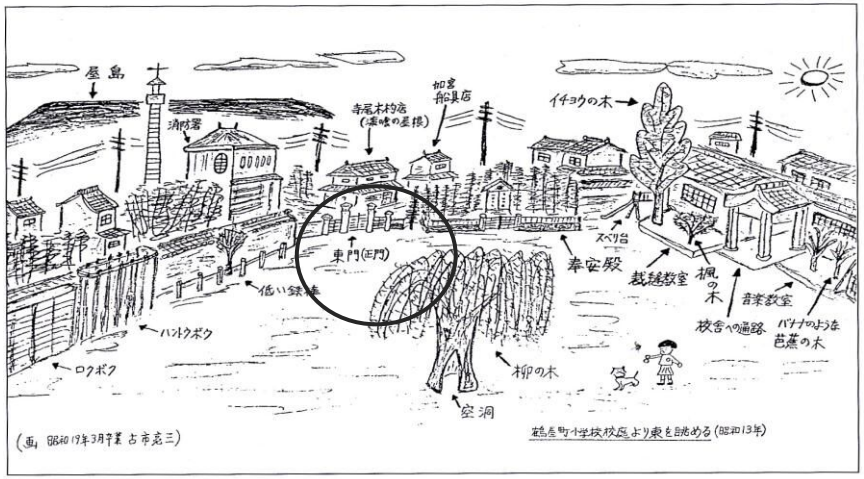
【図４】

運動場から西を眺めると



奉安殿の前に立って西の方を眺めると新御坊さん（西本願寺高松出張所）の大きな屋根、大衆座（木造三階建映画館）が左の方に見え、その向こうに当時高松で一番高い建物の三越と、その右側（北側）に徴兵生命ビル（現在の大和生命ビル）が遠望され、その左に少し低いが3階建の玉藻ホテル（鉄筋3階建のドイツ式）が見えた。そして左の方のずうっと向こうに遥か紫雲山が望まれた。※右側のビル（大和生命ビル）は、5年程前に大和生命倒産により取り壊された。

運動場から東を眺めると



運動場の真中から東を見ると、正門の左側（北側）に消防屯所があり、車庫には赤いポンプ車が常時３台か４台駐車し火事になると消防士（なぜか魚屋の主人が多かった？）が多勢乗り、「ウーウー」とサイレンを鳴らしながら火災現場へ向かっていた。正門の正面が寺尾木杓店（漆喰の屋根）、その左が鶴屋町で藤木折箱店、前の角に中条煙草店等があった。右の方は加宮船具店のみ —— 運動場から見えるのはもう一軒、ずうっと向こうの正面の徳島屋旅館。あとは遥か向こうの左の方に屋島が家々の甍（いらか）を見下ろすように南北に横たわっていた。

【図３】運動場から見た鶴屋町国民学校付近　円内門柱

【図５】明治４２年の地図

小六　　佐野　明子

清水のおじいさんの話　77才

新橋は元五重橋だった。

大正の終わりごろ塩田をうめ立てた。

仙場川を昭和2年にうめ立てた。

市役所を立てるお金を作るため，1つぼ70円～75円でうめ立て地を売った。

学校へ行く時，地区ごとにはたをもって登校した。

志度線の電車道を作るため，工事事務所に家をかしていた。

田村のおじいさんの話　76才

井口町にはいも問屋がたくさんあった。

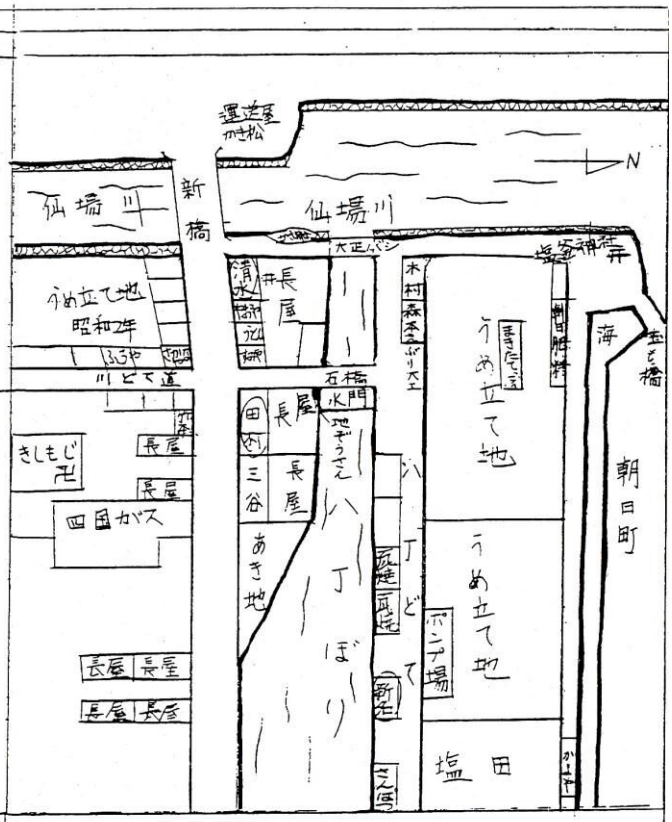
塩問屋もあった。

清水の近に井戸があった。

田村の長屋は，66年前にできた。

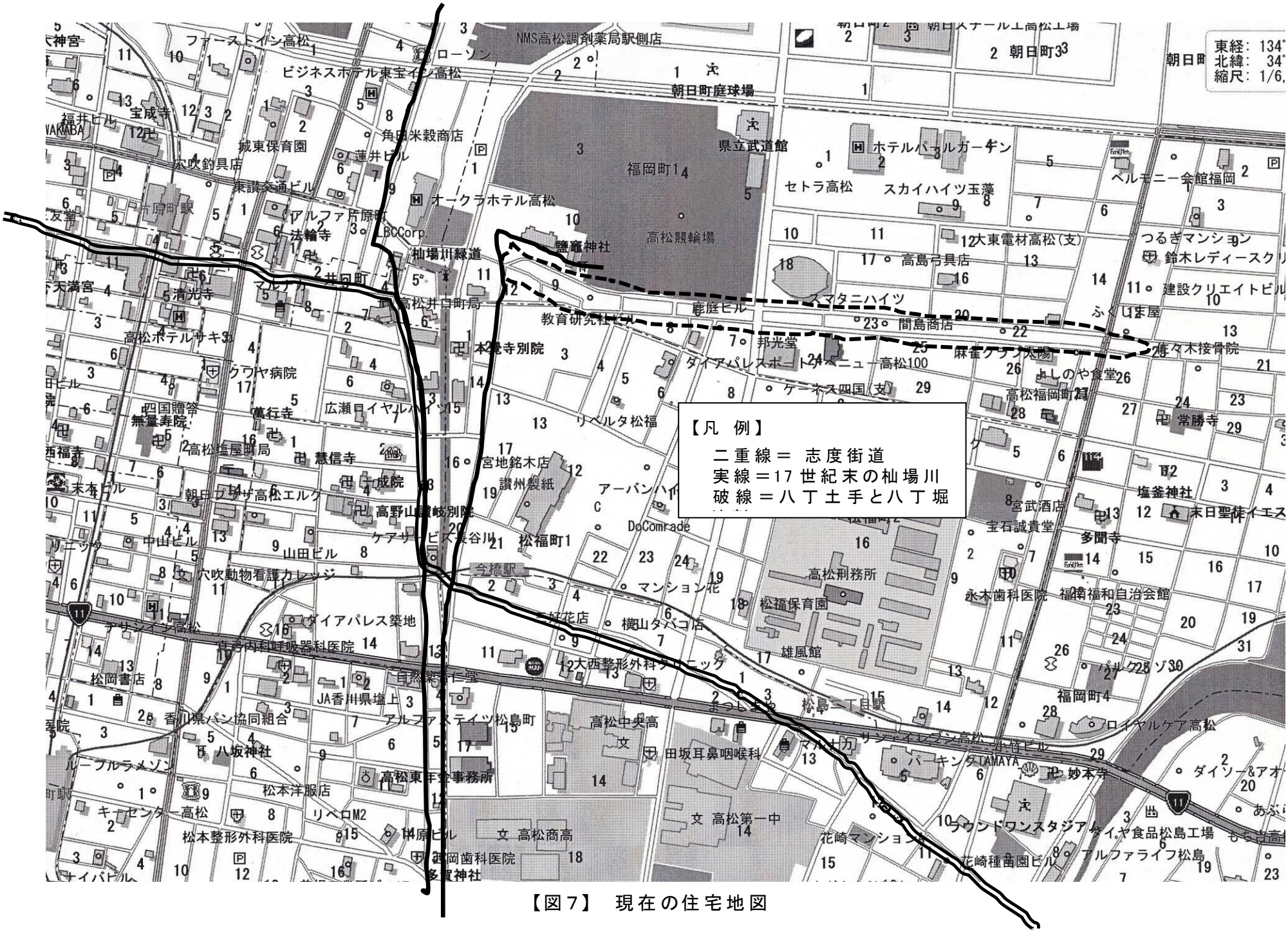
四国ガスは明治42年にできた。

技師が，きちみょうじさんの長屋から通う。



○話を聞いた家

【図６】昭和１０年ころの新橋付近


【凡 例】
二重線＝ 志度街道
実線＝17 世紀末の杣場川
破線＝八丁土手と八丁堀
東経: 134°
北緯: 34°
縮尺: 1/6,
朝日町庭球場
福岡町1
高松競輪場
県立武道館
ホテルパールガーデン
セトラ高松
スカイハイツ玉藻
ベルモニー会館福岡
大東電材高松(支)
高島弓具店
つるぎマンション
鈴木レディースクリ
建設クリエイトビル
スマタニハイツ
間島商店
邦光堂
麻雀クラブ太陽
ダイアパレスポートメニュー高松100
ケーエス四国(支)
よしのや食堂
高松福岡町
常勝寺
々木接骨院
ふくしま屋
鹿庭ビル
教育研究社ビル
オークラホテル高松
鹿竜神社
杣場川緑道
BCCorp.
法輪寺
清光寺
高松井口町局
本覚寺別院
クワヤ病院
高松ホテルサキ
四国贈答
無量寿院
広瀬ロイヤルハイツ
萬行寺
慧信寺
高松塩屋町局
リベルタ松福
宮地銘木店
讃州製紙
アーバンハイ
DoComrade
松福町1
高野山真言宗岐別院
成院
朝日プラザ高松エルグ
ケアサービス長谷川
今橋駅
穴吹動物看護カレッジ
ダイアパレス築地
高松内科呼吸器科医院
自然薬膳仁堂
JA香川県塩上
香川県パン協同組合
アルファステイツ松島町
八坂神社
高松東年金事務所
松本洋服店
リベロM2
松本整形外科医院
原ビル
高松商高
岡歯科医院
多賀神社
高松第一中
高松中央高
田坂耳鼻咽喉科
大西整形外科クリニック
横山タバコ店
好花店
マンション花
松福保育園
雄風館
高松刑務所
宮武酒店
宝石誠貴堂
多聞寺
塩釜神社
末日聖徒イエス
永木歯科医院
福南福和自治会館
福岡町4
パルクゾ
ロイヤルケア高松
ダイソー&アオ
あぶ
松島一丁目駅
サンシャイン高松
パキンタTAMAYA
妙本寺
ラウンドワンスタジアム
ダイヤ食品松島工場
アルファライフ松島
花崎マンション
花崎種苗園ビル
ローソン
NMS高松調剤薬局駅側店
ビジネスホテル東宝イン高松
ファーストイン高松
宝成寺
福井ビル
城東保育園
角田米穀商店
蓮井ビル
穴吹釣具店
東讃交通ビル
アルファ片原町
井口町
マルナカ
天満宮
高松ホテルサキ
朝日町3
朝日町
朝日スチール工高松工場
ルーフルラメゾン
キーセンター高松
松岡書店
中山ビル
山田ビル
来本ビル
ナイバビル

【図7】 現在の住宅地図

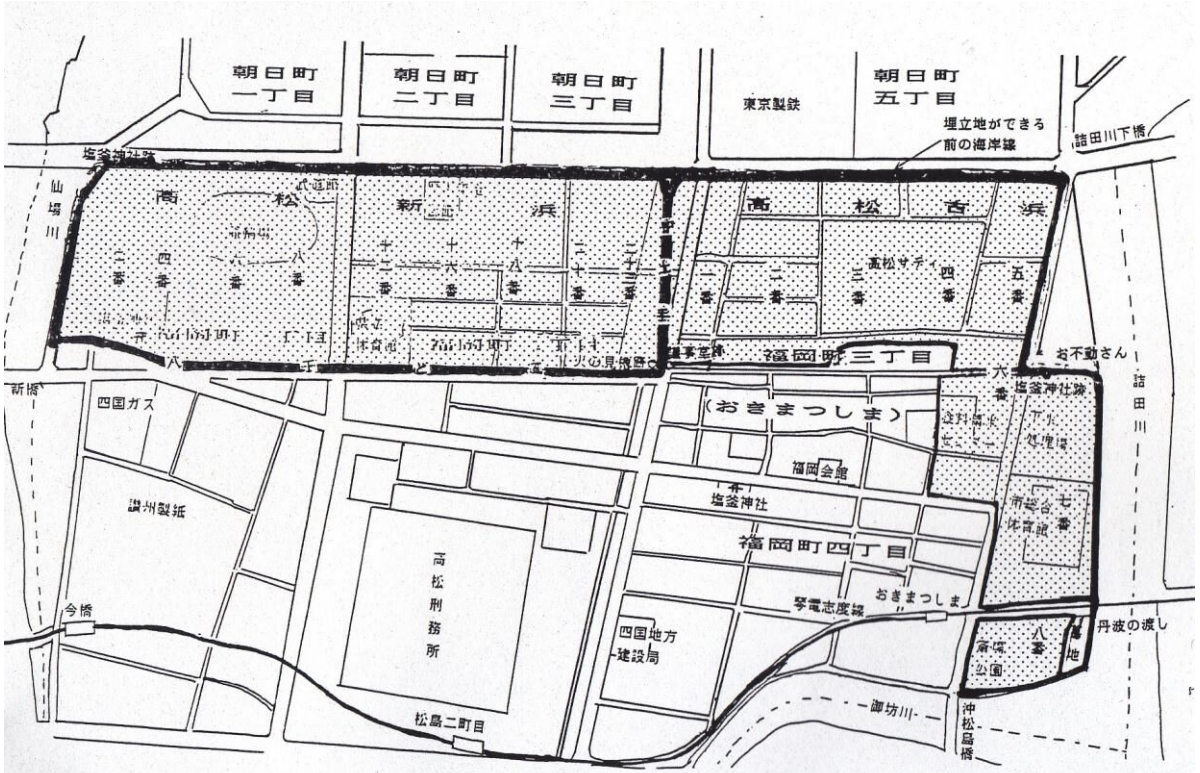
朝日町今昔

卒業生（S32年度卒）
武　田　一　憲

小学校から、自宅のあった朝日町の国鉄宿舎まで、思い出に浸り歩いてみたい。

新橋はその昔、木の橋だった。岸壁には牡蠣舟が係留され、下を流れる仙場川には石炭や材木を積んだ艀（はしけ）や釣舟が通っていた。

橋を左折すると道なりに鉄工所のコークスや石炭が山積みされ、雨の日はぬかるんだ。西側の海べりには小さな御社があり松等が茂っていた。その東側は枝条架のある塩田がひろがり、後に競輪場ができた。今は海岸通りとなり体育館などが建っている。今あるテニスコートは昔運河で、朝日町へはレンガ工場の先にある玉藻橋（今も石造りの欄干が残る）を通らなければ行けない陸の孤島だった。正面にあった専売公社も今は更地で、県立中央病院の建設予定地となっている。



【図８】大正末期頃の高松新浜・古浜配置図

【文９】

阿石尊塩濱開運大衆諸魚貝類為日登利益
若為大水所渋稱其名建即得滅慶
謂ゐ玉菊城東當而遠寄大洲有り
六範かの平洲且見有○美之
塩濱の相を作李万代の地寶と
志　故〻開発武藤新開○○
○○

【図１０－２】蛤地蔵刻文

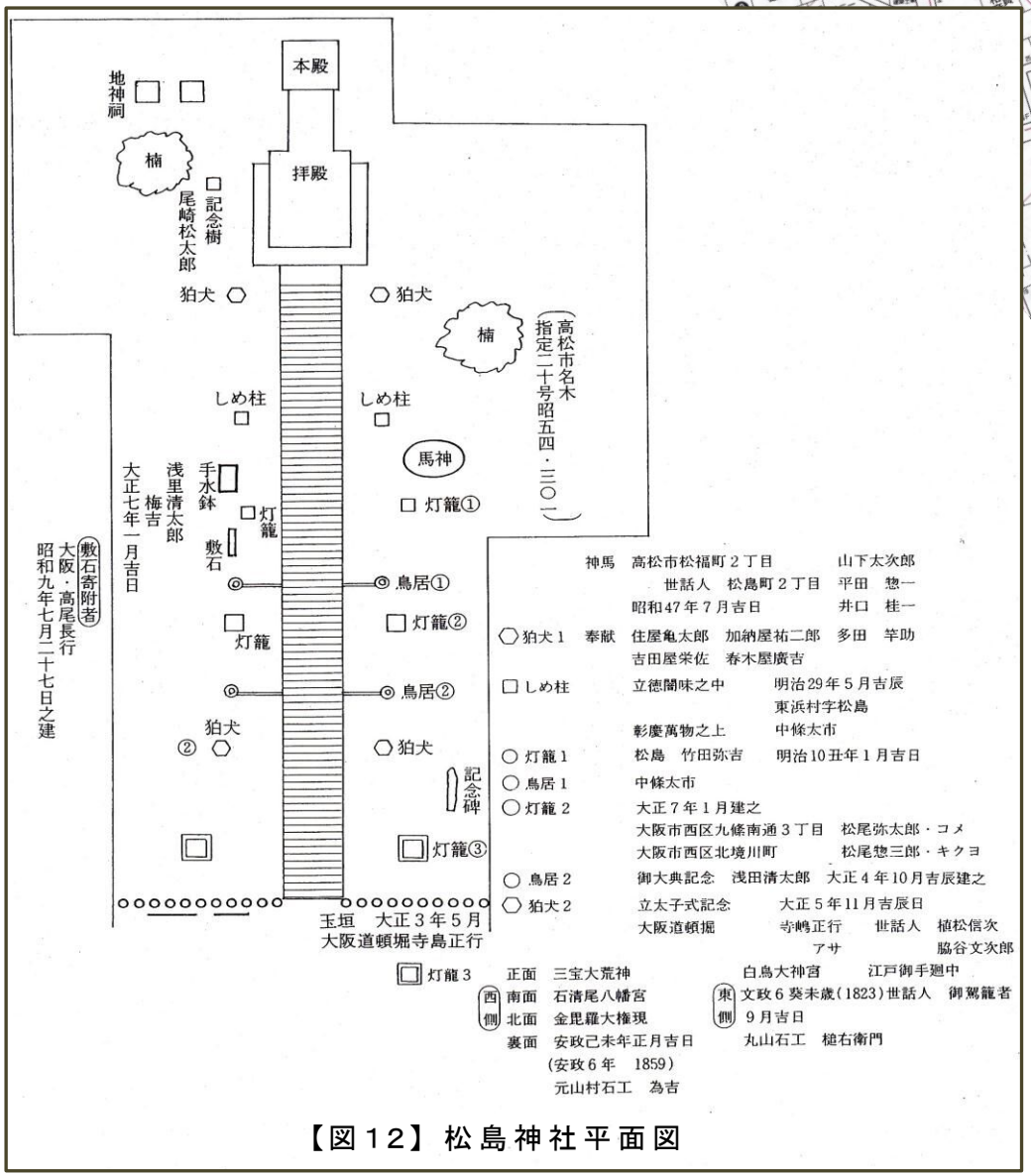
『もろもろの魚貝類は人びとの利益となつてきたのであるが、より多くの大衆の開運のため塩浜を造ることにした。ここは遠浅の海で玉蒲（藻）城の東にあり、遠くまで大きな洲がある。六か所ほど平らで、きれいに見えるところに塩浜の形態を造り、万代の宝にしたいと思いたち開発した。武藤新開と呼ばれた。』

明治三年三月　善　積　道　者

【図１０－３】蛤地蔵刻文意訳

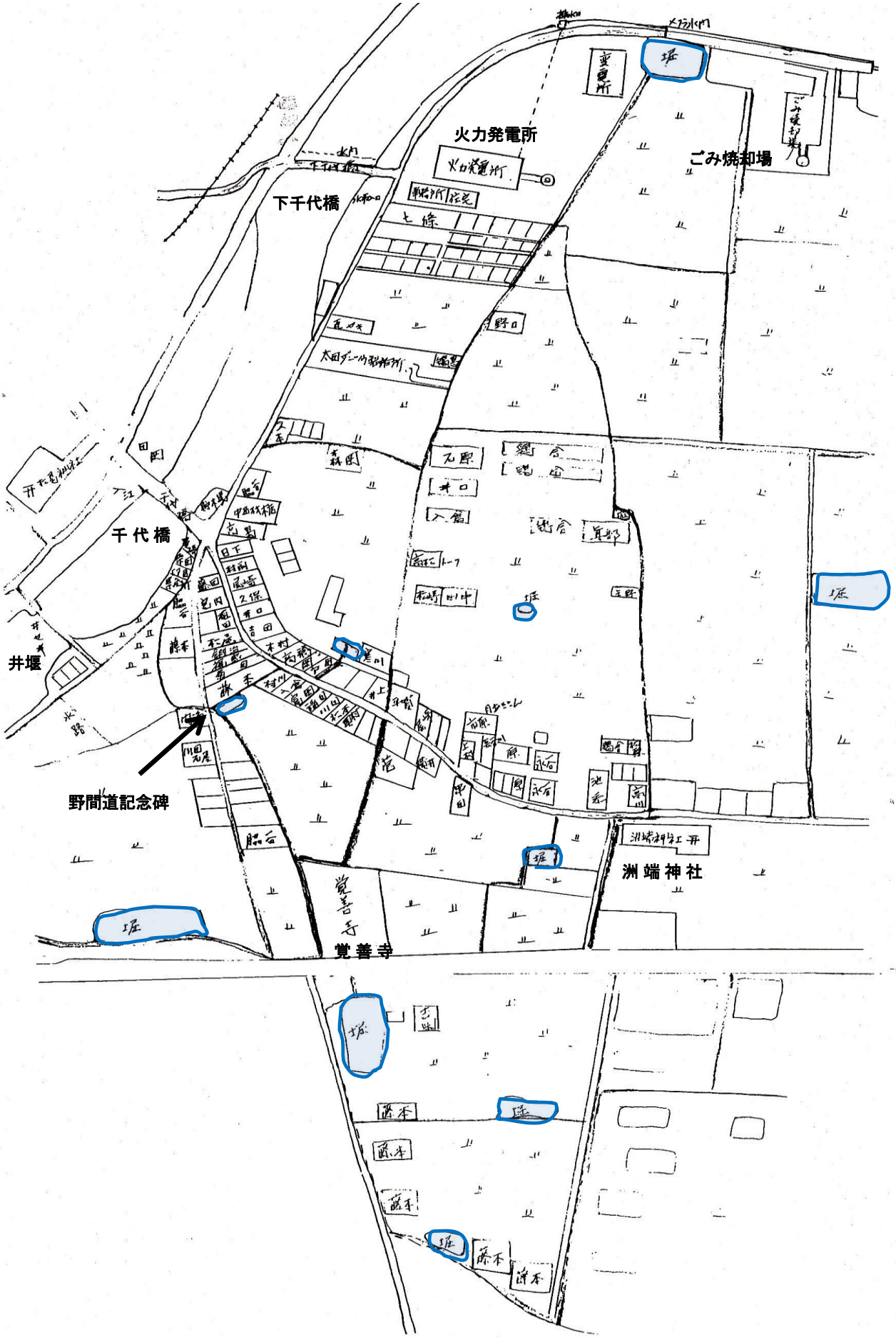
【図１０－１】蛤地蔵（刻文は左のとおり）

【図１１】平成元年の住宅地図

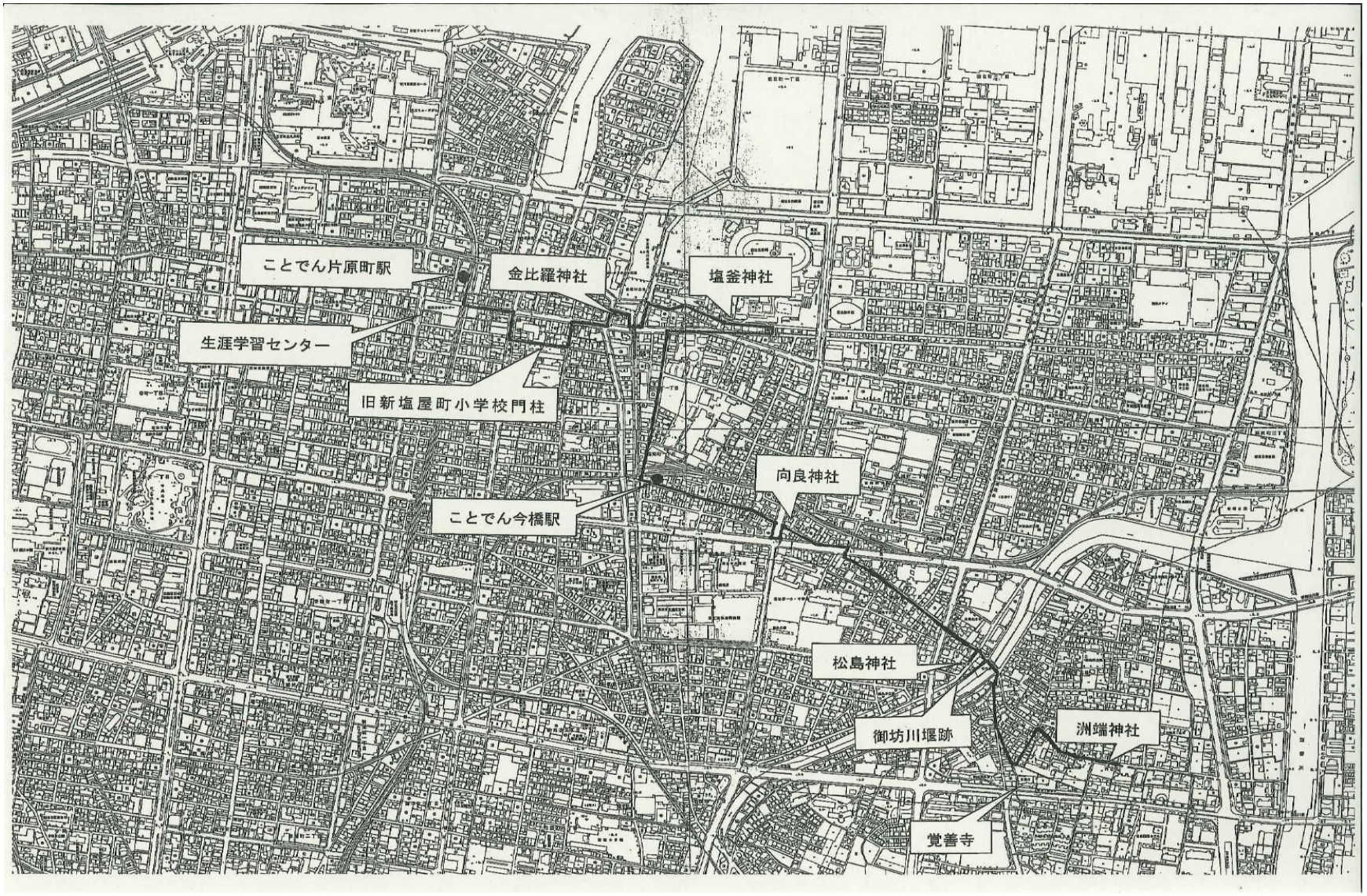


【図１２】松島神社平面図

朝日温泉



【図１３】　昭和15～20年頃の松島洲端の家なみ


ことでん片原町駅
金比羅神社
塩釜神社
生涯学習センター
旧新塩屋町小学校門柱
向良神社
ことでん今橋駅
松島神社
御坊川堰跡
洲端神社
覚善寺

５月２４日（日）松島町からの復路

◆ことでんバス＜瓦町・高松駅行き＞

（国際ホテル前）		（瓦町バス停）		（高松駅）
12：07	→	12：16	→	12：26 着
12：47	→	12：56	→	13：06 着

次回のふるさと探訪は・・・・

テ ー マ　三木町の山大寺池から神山地区を歩く（予定）

と　　き　平成２７年６月２８日（日）

９：３０～１２：００頃

集合場所　三木町総合運動公園（三木町上高岡山大寺池畔）

※運動公園駐車場に駐車できます。

講　　師　千葉　幸伸さん（高松市歴史民俗協会会長）

☆広報「たかまつ」６月１５日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL839-2660「午前７時３０分～開始時間まで」）でお知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）

「ふるさと探訪」に

参加される皆様へ

※　参加中は、次のことに充分留意し、

安全で意義のある探訪としましょう。

1　交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
（必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を一列で歩きましょう。）

2　無理をせず、体調には十分気を付けましょう。

3　引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。

4　マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。

5　文化財や自然を大切にしましょう。